

# なぜ錦楽寺は廃れ、吉備彦神社は存続したのか

## 「錦」の意味するところ

金楽寺の地名は、「真備が唐土を錦の袋に入れて持ち帰り、錦楽寺を建立した」旨に由来することは、前号で述べたとおりですが、その拠所は『大日本地誌大系 25巻』に訳本収録されている『撰陽群談』によるものです。(写真：線①) 原文では「彼地の埴土を取て錦の袋に入れ帰朝す。其土を設て是に置き、因て錦楽の號ありと云えり」とあります。錦とは、様々な色糸を用いて織り出された貴重な絹織物のことです。例えば「錦を飾る」とは、功を成し遂げて故郷に帰ることを意味します。当時の錦は、極めて高価で価値あるものでした。真備は唐土をわざわざ錦の袋に入れ、万感の想いをこめて大切に持ち帰ったのでしょう。唐土を入れた錦の袋…錦楽寺の地名は、このように真備の特別な想いに関わったものです。錦楽寺跡、吉備彦神社には唐土を埋めたとされる空井戸があり、真備の想いが伝わってくるようです。



吉備真備

『撰陽群談』活字訳本 →

尼崎志 第2編 P376-377(1935年発行)

線②は『撰陽群談』転載—『小田村のしるべ』転載—『尼崎志』

錦楽寺 同郡錦楽寺村にあり。元正天皇御宇、吉備大臣公入唐、聖武天皇天平五年、歸朝の期當寺草創、一品天神社記に詳也。

錦楽寺村 所傳云、吉備公は元正天皇の時の人也。博學才智世に超たり。養老年中に、帝勅、吉備遣唐使と成る。在唐の時、野馬臺の詩を讀しむ。文義曉し難し。蜘蛛糸を引て以之。即時讀ことを得たり。其蜘蛛の行所を見る。穴に入て終に不得求。彼地の埴土を取て錦の袋に入れ歸朝す。其土を設て是に置き。因て錦楽の號ありと云へり。猶亦一品天神社記に比す。○西長洲村在皮田

② 國ノ莊吉備公ノ領地タリシ時長洲宮大門ニ錦楽寺ヲ建立セラル其後當社ハ民村ノ公ヲ祭リシ祠ナリトモ言ヒ傳フ

とある若し右を信據する時は、錦楽寺の舊址は即ち、前記北寺の加茂神社の地及び現在東長洲の貴布禰神社の所在地であつて、字大門は現に長洲貴布禰神社の北背後の田地である。そして、假に、字北寺に金堂を置き、その南字大門に、南大門(山門)を置き、そして東長洲貴布禰神社の邊に、一山の鎮守社を置く時は、柱古傳へる如き錦楽寺の伽藍の城がこの地に發軔とすることでもある。附近に字コモ池がある。菰池蓋但し或は買茂池の轉化にもや。

然る時は、現金樂寺村は、古昔錦楽寺存在當時の門前村であることになるのである。そしてその地に吉備神社を祭るところである。又但し若し現金樂寺村を錦楽寺舊址とする時は、その寺東面して南大門を東方大門の字地に置き、長洲の貴布禰神社は、何れよりするもその大門前の鎮守社の位置である。

金樂寺村は、東長洲中長洲の次に在り更に西に西長洲を隣して、要するに金樂寺の東西兩袖は何れも長洲の地名であつて、元より金樂寺も長洲の地の一隅である。吉備神社は福陽群談の寺院のところに、

錦楽寺 同郡錦楽寺村にあり、元正天皇御宇吉備大臣公入唐聖武天皇五年歸朝の期當村草創一品天神社記に詳也

同じく神社のところに、

天神社 同郡錦楽寺村にあり、祭神吉備大臣也。元正天皇御宇、養老年中吉備公入唐聖武天皇天平五年歸朝於于安錦楽寺を營建して唐土を袋に埋む其地跡に表祠を置いて一品天神と稱す村の部地名の記に詳也。

そして小田村のしるべ(天正十三年小田村役出書に記すところ)は、

吉備彦神社金樂寺祭神吉備大臣 吉備公唐ヨリ歸朝ノ際舟ヲ此地ニ泊メ給ヒシヨリ祠建フトモ亦餘部ノ莊鎮



金樂寺古蹟神社

## 民の力

さて、なぜ錦楽寺は廃れ、吉備彦神社は存続したのでしょうか。真備はやがて大納言や右大臣まで上り詰めたぐらいですから、相当の政治力あったものと思われます。帰国後の寺の建立の計画や資金調達も順調にできたのでしょう。しかし、建立された当時は栄華を誇っても、真備が亡くなって時が移りゆくにつれ、寺の担い手もいなくなり、やがて廃寺となったと考えられます。

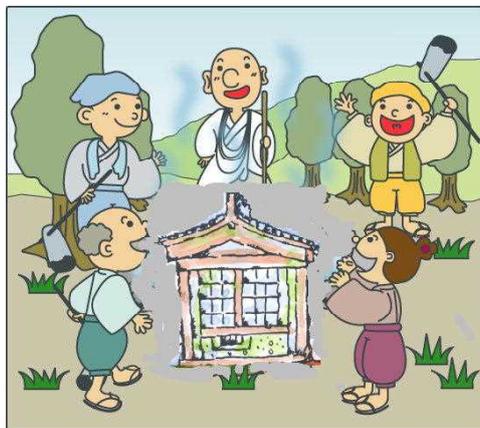
一方、吉備彦神社はどうでしょうか。『摂陽群談』によれば「錦楽寺ヲ建立セラル、其後當社は民村ノ公を祭りシ祠ナリトモ云ヒ傳フ」（写真：線②）とあります。錦楽寺が建立されたのち、その敷地に村人によって小さな祠が建てられました。寺の敷地に祠（神社）？と思うかも知れませんが、寺と神社の隣在は神仏習合（神仏混淆）と呼ばれ、割とよく見かけます。

神々の信仰は本来土着の素朴な信仰であり、共同体の安寧を祈るものです。神は特定のウジ（氏）やムラ（村）と結びついて、その信仰は極めて閉鎖的なものでした。地域の信仰、鎮守として、代々地域の人々の手によって祀られてきたのでしょう。そして、信仰の場であるだけでなく、祭礼など村の祭りの場であったり、人々の憩いの場、子どもたちの遊び場としても発展し、根付いていったと予想されます。それとともに、最初は小さな祠だったものが、村の発展とともに建物もだんだんと立派になり江戸時代には今のような吉備彦神社の形になったと考えます。錦楽寺＝時の権力者による官営、吉備彦神社＝村の人々による民営…この違いが存続の明暗を分けたと察します。

なお吉備彦神社は、江戸時代以前は単に「天神社」（または小字を付けて一品天神社）と呼ばれ、祭神は吉備大臣（吉備真備）としていました。社名が現在と同じ「吉備彦神社」と記されるようになるのは、文献としては『明治12年調神社明細帳』以降で、祭神も「吉備大神」と称する「真備の霊」に変わっています。

## 一つの字から 広がる 深まる

「錦」という一文字に着目することで、真備の想い、ひいては「錦楽寺（金楽寺）」という地名に対する私たちの思いもまた、随分と違ってきます。史実をもとに何を感じ、何をイメージするか…学習とは、知識や体験に基づいて推理や探究・思考を重ね、検討検証していく活動とも言えます。読解力とは、単に読んで理解するだけでなく、行間を読み取り作者の想いや背景を解する力です。何度も探りながら読み返すこと、一文字をすくい上げることで、解釈もより深くなっていくでしょう。



受け継がれる民の力 信仰心